

第4章

ポルテッロからアレーゼへ



家庭の事情でちょっとした問題が私の身に降りかかってしまって、不本意ではあったのですが、人事部に新しいアレーゼ工場への移動希望を出しました。

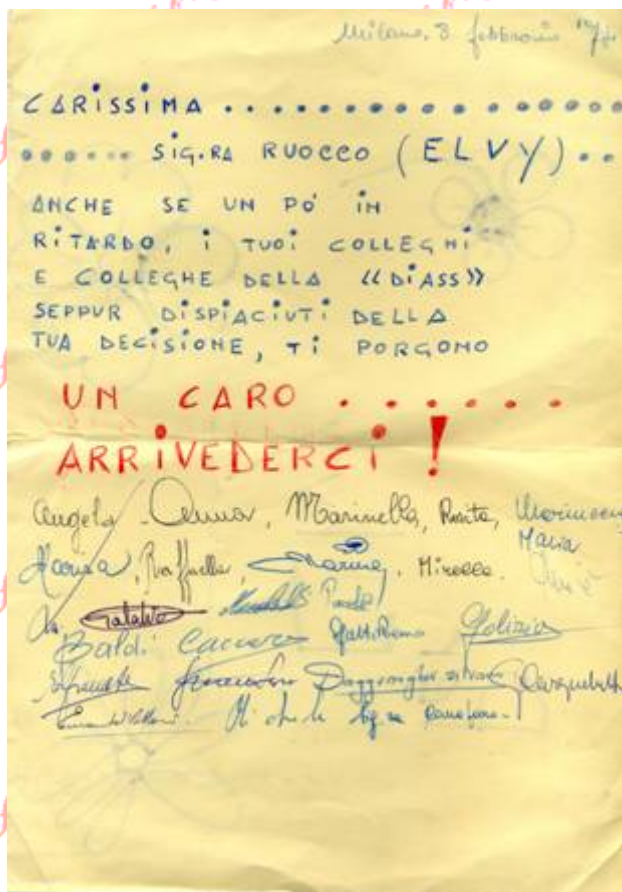
そんな間も私の仕事は順調に行っていました。職場の雰囲気はますます家族的でフレンドリーになり、時々海外からの来賓客からもたらされるニュースで盛り上がりました。心温まる思い出は、あるナイジェリアのエンジニアで、彼はアルファ・ロメオの熱心なアッパーパッションートでしたが、たどたどしいイタリア語で自分は貴族の出身だと話していました。それならば、彼の話していることを証明する必要があると言いながら、彼を優しくつまみあげてあちこち回りました。彼は好感の持てる魅力的なキャラクターの持ち主で、他の2人のナイジェリア人の同僚とやって来ていて、彼らが一緒にいると誰が誰だか見分けがつかなくなってしまいました。勇気を持って言うならば、サービス技術教習部の皆が楽しみにしているアトラクションみたいな感じでした。みんな彼らと休憩時間を過ごしたくて争っていました。私たちはお昼休憩が始まるベルが鳴ると、食堂に行こうと思い、彼らを待っていたのを思い出します。早歩きというか、ほとんど走って薄暗い近道のトンネルを抜けました。雨降りや寒い日にはこのトンネルはすごく快適で、工場労働者のロッカールームがあり、その長い壁には長い洗面台があり、その内部には温水用の細い配管が張り巡らされていました。食堂に行かない工場労働者はそこで昼食を入れた容器を温めていました。ここ、ロンバルディア地方ではこのお弁当箱のことを「schiscetta」（スキシェッタ）」と呼んでいます。食堂に入ると、油で床が滑りやすく転倒するのが怖くて、走るのをやめました。それ



から、空席を探すのですが、なかなか空席が見つからず、席が見つかってもしそこに用意されていたはずの皿もない状態でした。どういうシステムかわかるように説明しますね。つまり、非常に長いテーブルがいくつあって、あるテーブルと他のテーブルの間には食事の配膳係の女性がワゴンを押して行き来しています。そして、そのサービスの効率化のためにワゴンには皿が満載されています。その結果、着席して給仕を受けることができ、待たずに食事をするのが出来るのです。個人的には、すでに用意されたほとんど冷えている食事が載った皿をわざわざ探すのは好みませんでした。ですから、私はまだワゴンがやって来っていないテーブルを探しましたが、誰もが同じで、一番にそのテーブルに着くのをみんなが競っていました。

その頃のことや、とりわけポルテッロでの仕事のことを思い出すと、無限のノスタルジーを感じるとともに、すばらしい二度とない期間を経験したと感じています。またそれらは若き日の熱意や希望の日々でもありました。

貴族の出身だと主張するナイジェリアのエンジニアの話に戻りましょう。そうですね、彼は高貴なところを見せてみると何度も挑んでくる相手に対してそれを証明すると約束していたのです。仕事の最終段階を迎えると、私たちのところにお別れの挨拶をしに来ましたが、なんと、彼は家系を示すコスチュームを身に纏い、わざわざナイジェリアから届けさせた、宝石がちりばめられた冠を頭に載せていました。それは写真でしか見たことのないようなすばらしいものでした。



1974年2月8日、残念ながら私の送別会が開かれました。人事課の dr. Agazzi (ドットーツレ・アガッツィ) 氏との面談を終えると、私はアレーゼへの転勤が決まりました。配属は産業車両課で、多くの営業所に重車両を配備する仕事に忙しい Apino (アピーノ) 氏をサポートする仕事でした。

あの2月8日の寒い朝、私はプチケーキやボトルをいくらか購入しました。サービス技術部の同僚たち全てと乾杯するために。みんな私の決断を残念に思ってくれていましたが、彼らから、暖かいお別れと皮製のかわいいバッグ、そしてスーパーモダンなベルトをプレゼントしていただきました。

続く...

[Elvira Ruocco \(elvira.ruocco@alfasport.net\)](mailto:elvira.ruocco@alfasport.net)